

インドネシア・バンダ・アチェでの災害と障がいに関わるフィールドワーク（2024/1/29-2/8）

テーマ：ハザード、災害、障がい、脆弱性、レジリエンス、2004年インド洋津波
調査地：インドネシア バンダ・アチェ

2024年1月29日から2月8日まで、ボレー・セバスチャン准教授（国際研究推進オフィス）、朴慧晶助教（災害医療情報学分野）は、インドネシアのバンダ・アチェで現地の共同研究者（Alfi Rahman（シア・クアラ大学）、Praditia Putri Pertiwi（ガジャマダ大学）、Muzayin Nazaruddin（Universitas Islam Indonesia）、Yulia Direzka（アチェ総合病院臨床心理士））と共に、「インドネシアにおける災害と障がいに関する研究：2004年インド洋地震と津波から学ぶ」と題した共同研究の一環で、フィールドワークを実施しました。

この研究の目的は、2015年のUNSDGによって作成されたスローガン「誰一人取り残さない」を参考に、障がいのある人々とその介護者のニーズを理解すること、そして、これらの人々にインクルーシブな防災の機会を提供することです。研究チームは、3年の研究期間を設定し、2004年のバンダ・アチェにおけるインド洋地震と津波から障がいのある人々の経験を理解し、バンダ・アチェ政府が障がいのある人々の災害リスクを軽減するために開発した近年の規制や政策を調査することを目標にしました。

フィールドワークでは、国が支援するインクルーシブ教育システムを導入している高校（Man 1）と小学校（Min 9）の2つのモデル学校と、様々な障がいを持つ学生が登録されている支援学校（SLB TNCC）を訪問しました。研究チームは校長先生や教師にインタビューを行い、障がいのある学生たちがインクルーシブ教育に関わる様々なカリキュラムにどのように組み込むことができるか、また災害への備えの必要性について調査しました。また、バンダ・アチェで障がいのある人々との関係性を開発するために活動しているNGOとインタビューを実施しました。研究チームは、政府や海外からの援助が充実しているにもかかわらず、障がい者や福祉制度の欠如など、弱い立場にある人々が依然として多数存在することを把握できました。最終的には、障がいのある人々の社会環境、災害経験、災害への備えの必要性を理解するために、個々の参加者とのミーティングを行いました。参加者には、知的障がいのある息子を育てる母親や、2004年の津波で片足を失い、現在は障がいのある若者を支援する団体を運営する女性など、障がいと向き合う様々な人々が含まれていました。

さらに、研究チームはシア・クアラ大学の津波・防災研究センター（Tsunami and Disaster Mitigation Research Center, TDMRC）を訪問し、2024年11月8～9日に開催される2004年インド洋津波から20周年のための「AIWEST-DR 2024」について議論しました。将来、この共同研究グループが持つ様々な現場経験と固有の知識に基づいて、AIWEST-DR 2024はインクルーシブ防災の実現と災害リスクへの対応キャパシティを強化するために、さらに実践的・体系的な災害リスク軽減措置を講じることに貢献します。

文責：ボレー・セバスチャン（国際研究推進オフィス）
朴慧晶（災害医療情報学分野）

（次頁へつづく）



支援学校で
 研究協力者、教師、学生たちと共に



研究協力者の家でのミーティングの様子



シア・クアラ大学の
 津波・防災研究センター (TDMRC)



モデル高校 Man 1 のインスタグラムに
 掲示された研究チームの訪問